

的にみると、知覚対象に備わっている知覚対象独特の性質を定義づけようとして出てきた概念なので、主観的経験でありながら、対象の特性に結んで語られることのほうが多い傾向がある。

たとえば色を見るとき。このときわれわれが主観的に経験する赤の感覚の程度や質は個人によってさまざま、他人には伝えられない部分を持っている。このことを赤の「赤性（赤さ加減）」などと表現したりする。知覚対象に結んでクオリアが説明されるのである。

筆者の考える感覚性感情はこうした説明で理解されているクオリアよりもっと広くて、もっとあいまいな経験である。今見えているこのカタチ（視覚性心像）はおれの眼から入ってきたものだよ（視覚性感情）、今聞こえているこのカタチ（聴覚性心像）はおれの耳から入ってきたものだよ（聴覚性感情）という、心像生成の発生元についての神経活動の履歴の経験である。このような感情は、怒りとか喜びなどという、こころの揺れの感じではない。知覚活動に伴う独特の感じである。クオリアと呼んでもいいのだが、これまでクオリアを取り上げてきた学者たちは、どうもクオリアを知覚経験の「要素」みたいな捉え方をする傾向があるので、使い勝手がよくない。筆者が捉えようとしているものは、要素ではなく、むしろ連続である。たとえば視覚性感情は、視覚経験に限局する感情ではあるが、特定の視覚対象の性質にかかわる経験ではない。すべての視覚経験を通底する瀰漫性の経験である。

話がやや煩雑になるが、ついでに言うと、実は感情にはもう1つある。われわれの主観的経験そのものを保障してくれる感情で、「背景感情」とでも呼ぶしかない経験である。たとえば、起きて意識が活動し

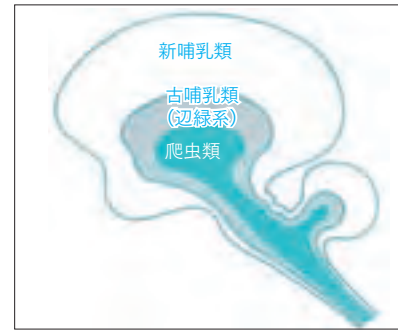
はじめたとき、まず感じるのは、「ああ、目が覚めた」というこころの動きである。疲れて眠くなったときには、「ああ、眠い」という感情が動く。あるいは起きて目が覚めたとき、今の自分が昨日の自分とつながっている感じがある。このような感情は情動性の感情とも知覚性の感情とも微妙に違う。別の神経メカニズムがその発生に関与している可能性がある。そのあたりはまだよくわからないが、自分の経験の、過去未来にわたる同一性を保障してくれる感情である。

感情はこころに瀰漫して、こころの全体感を作り出してくれる経験だから、これら3種の感情も当然お互いに入り混じっている。こうした複雑な感情を土台に知覚性心像が出現する。

感情から心像へ

ある一定の神経ネットワークの働きが複雑な電気現象を作り出す。このとき、同時に一定の心理現象が生成する。電気現象は電気現象で、次のさらに複雑な神経ネットワークの働きを作り出し、このネットワークがさらに複雑な電気現象を作り出す。するとまたこの電気的な働きに対応して、さらに複雑な心理現象が生成する。心理現象の変化に関しては、心理現象の中で因果関係を探らなければならない、というのはこの意味である。電気現象は電気現象で複雑化し、心理経験は心理経験で複雑化するであろう。

長い長い動物の進化の時間経過の中で、いつのころからか、こころが発生したのであろう。まず瀰漫性の感情が誕生し、ついで、少しずつ少しずつ複雑な心的経験が誕生するようになってきたのであろう。つまり心像という、われわれが自分のこころに経験するカタチは、カタチを持



古い脳を抱え込みながら進化する脳
人間の脳はいちばん外側の新哺乳類脳よりもっと大きくなっている。マクリーン『進化する三位一体脳』(1990年)より。

たない瀰漫性の感情、中でも感覚性感情の複雑化につれて出現した心的形式ではないかと考えられる。

この長い時間をかけて生じた心理現象の複雑化、すなわち感情から心像への進化の過程は、われわれのこころの中で、意識下状態のこころから、意識化状態へ変換されるとき、一瞬間に繰り返されると考えられる。このあたりになると、まったくの仮説になるが、われわれのこころの歴史は、その始まりから現在までがすべて、1つの「純粹持続」に圧縮されている。この圧縮が感情である。この圧縮が、今現在の主体の必要に応じて、意識化されて気づきの対象となる。意識化という働き、対象化という働きが、圧縮をほどいて、個別の心像群を、つまり気づきやすいカタチを生成するのである。意識化の働きが、この連続をカタチに切り出す（分節する）のである。意識から外れると、このカタチはまた元の純粹持続へ帰ってゆく。

こころの中では、こうして心像のカタマリがほぐれたり、また集まったりしているのである。心像も、その母体である感情も、絶え間なく動いているのである。

参考文献

山鳥重『知・情・意の神経心理学』青灯社、2008年

論考

身体技法と社会学的認識

倉島 哲 Akira Kurashima

(関西学院大学社会学部専任講師)



見えるものとのできること

新しく何かができるようになると、それまでのものの見方ががらりと変わってしまうことがある。英語が読めるようになると、それまではデザインとしか思っていなかった看板やTシャツのアルファベットが意味を持ち始める。車を運転できるようになると、自分がそれまでどれほど危険な自転車の乗り方をしていたかに驚く。子どもの目線からものを見ることができるようになると、幼児向けだと思っていた絵本やテレビアニメが意外と面白いことに気づく。このように、ものの見方は、見る人に何ができるかに依存している。

誰でも、この単純な事実を経験的に知っている。そして、自分の見方だけが絶対的ではないことは、少なくとも建前としては、わかまえている。誰もが、自分が見えるものに依拠して物事を判断して行動するほかないが、自分と他人ではできることも、見えるものもきつと違うはずだということを常に思い起こしながら、なんとかして自分と他人の接点を探り合っているのではないだろうか。

およそ人間関係というものが、異なるものの見方どうしの探り合いであるなら、社会とは、こうした探り合いの総体であることになる。このような社会——価値観やルールを共有する人々の集合——とは異なっている。ここで提案したいのは、共通の価値観に依拠しているつもりでも重点の置き方が異なり、共通のルールに従っているつもりでも適用の仕方が異なり、共通の利害関心を追求しているつもりでも実際の振る舞いは

異なる人々が、にもかかわらず持ちうる関係として社会を構想し直すことなのである。

異質性の社会と太極拳

伝統的な社会観が均質性をキーワードとするなら、新たな社会観のキーワードは異質性である。Tシャツの文字に赤面したり笑ったりする外国人や、車道いっぱい広がって自転車に乗る若者。最新のパソコンを人差し指だけでタイピングするお年寄りや、テレビアニメの同じ話ばかり毎日繰り返して見たがる子ども。これらの他者を、社会から排除もせず、同化して包摂もしないための方法が模索されているいま、異質性を中心にすえた社会観を提出することは意味のあることだろう。

そのためには、見えるものとのできることの相対性を具体的に捉えるためのフィールドが必要である。人は、自分とはできることが異なる人の存在をどのように知るのだろうか。そして、できることの異なる人が、見えるものも異なる他者であることは、どのように推論されるのだろうか。さらに、見えるものの異なる他者どうしは、どのように共存できるのだろうか。これらの問いは、抽象的な一般論によってではなく、フィールドの具体的な事実によって答えられねばならない。

私は、このような問題関心に導かれ、太極拳教室のフィールドワークを行ってきた。京都にある教室で4年、イギリスのマンチェスターにある教室で2年にわたり、毎週数回の練習に参加しつつ、先生や生徒にインタビューを行ってきたのである。それによって、太極拳ができるようになることが、見えるものをどのように変化させるかを経験的に記述することができた。また、見えるものの異なる人々どうしが取り結ぶこと

のできる関係のありようについて、一般化可能な展望が開けてきた。

日本のS流

私が最初に太極拳の調査を行ったのは、京都にある武術教室S流である（名前は伏せてある）。これは、中国の太極拳に、日本の剣術や柔術の要素を取り入れて比較的最近作られた流派であるため、日本で練習されている一般的な太極拳を代表するものではないが、1人で行う型の練習は、一見して一般的な太極拳とほとんど変わらない。先生が教室の前で円を描くようなゆっくりした一連の動作を行い、生徒たちがタイミングを合わせて同じ動作を行うのである。

この教室の特徴は、1人で行う型に加えて、日本の武術の練習方法も取り入れていたことである。それは、2人1組になって、技をかける方（「捕り」という）と受ける方（「受け」という）を決めたうえで、決まった手順に従って行う対練の型の練習である（図1）。最初に突いたり蹴ったりするのが「受け」の役目であり、それを受け流して最後に相手を投げのが「捕り」の役目である。このように、型では動作の手順はすべて事前に決まっているため、スポーツのように優劣を客観的に判断するためのルールのもと、勝敗を競うわけではない。

しかし、対練の型はただ漫然と反

復されるわけではない。それは、第1に、双方が決められた手順どおりに動いても、「捕り」が「受け」を投げることができるとはかぎらないからである。そして第2に、先生は、「線」をはじめとするさまざまな比喩を用いて「捕り」が目指すべき動作を指導するからである。たとえば、「相手の線を取る」、「相手より先に自分の線を作る」、「相手の線に自分の線を斜めに切り込ませる」などである。

先生の言う「線」は、目に見える物理的な実体ではないため、S流の生徒たちは、先生の指導するおりに「線」という基準に照らして自分の動作を調整することができない。あたかも、定規が手元にないのに、定規を使って直線を引きなさいと指導されるようなものである。

「線」を作ることと使うこと

しかし、S流の「線」には定規と異なる面もある。定規ならば、それを作ることと使うことは別であり、作ってから使うという時間的な前後関係がある。ところが、私がS流の練習を重ねることでわかったことは、「線」が感覚としてわかることと、「線」という基準に照らして動作を行うことができるようになることとは、まったく同時に達成されるということである。

私は、初めて「線」の感覚がわかっ

たときのことを忘れることができない。練習を始めて2カ月経った頃、2人で行う型のひとつである「金剛^{こんこう}搗捶^{とうすい}」の「捕り」を練習しているときのことだった。この型は、相手が突き込んでくる右腕を自分の左腕で絡めとってから、1歩踏み込みながら自分の右腕で相手をうしろに投げる技である。先生がこの型をやると、勢いよく突いて来た相手は、簡単にうしろにひっくり返されてしまう。しかし、私がやると、右腕が相手の胸にぶつかってしまい、そこで動作が止まってしまうのだ。先生はしばしば、困っている私に対して、「相手が線を作ってしまう前に、自分の線で斜めから切り込む感じ」が大事だと教えてくれたが、何度やってもうまくいかなかった。

しかし、この日は、自分の右ひじの内側を相手の胸の中心に早めに軽く当てて、そのまま斜め上にすりあげると、相手のバランスを簡単に崩してしまえることに気が付いた。それまでは、向かってくる相手に対して反射的に押し返してしまっていたため、力が拮抗して止まっていたのだ。ひじは相手の胸に軽く当てるだけで、あとは斜め上に動かすという動きをするためには、押されたら押し返すという反射的な運動を乗り越える必要があった。これができたとき、自分の右腕の前腕の内側に「線」ができた感覚がある。まさに先生の言ったように、この「線」

を相手に斜めに切り込む感覚なのだ。

この感覚がわかってから、私はそれまでよりもずっと軽く、止まらずに繰り返して相手を投げることができるようになった。それを見ていた先生は、「そうや、そうやって線を取るんや」と言った。もし、「線」が動作の基準として知覚されたにすぎないならば、私が内的な身体感覚として感じていることを先生が外から見ることができたのは、高僧の以心伝心のような不思議な出来事であることになるだろう。しかし、実際は、「線」が動作の基準として知覚されたのは、この基準を用いた動作においてであった。「線」に照らして動作を見ることと、「線」にかなった動作をすることは同時に可能になったのだ。であればこそ、先生の言葉は、私にとって不思議ではなかったが、うれしくはあった。

このうれしさは、先生の見ているものと私の見ているものがこれほどまでに違っていたことに対する驚きと、にもかかわらず、先生と同じものをなんとか見ることができるようになったことに対する安堵が交じり合ったうれしさである。私は、透明でどこまでも見通しがきくと思っていた世界が、実際は、他者としての先生の不透明な世界と境界を接した、自分の世界にすぎないことに気づかされると同時に、この他者の世界を垣間見ることのできる接点を発見したのである。この接点こそ、「線」の感覚とそれに結びついた動作である。この接点に依拠して、私は、先生と先輩の多くが「線」にかなった動作をしていることを見て取ることができるようになった。

できないことを通して見えないものへ

はじめて「線」の感覚を得た興奮が過ぎると、先生と比べて自分はま

だまだ金剛搗捶の型ができていないことに気づいた。たとえば、「受け」が通常よりも少し早く突くと、私はあわててしまつてつい反射的に押し返してしまうし、身体の大きい相手が突いてきたときも投げることができない。しかし、先生はこのような場合でもみごとに相手を投げることができる。そのため、私は、自分に見えている「線」が先生のそれに比べればまだまだ底の浅いものに違いないと感じざるをえなかった。だがその反面、このように感じたからこそ、私は、先生に見えている「線」に近づくことができるかもしれないという楽観的な予想のもと、練習を重ねることができた。

この予想的中した。調査を開始して1年ほど経たころ、私は、それまでの自分の「線」の感覚が間違っていたことに気がついたのだ。それまで私は、右前腕をできるだけ早く相手に接触させて相手の「線」を取ろうとするあまり、無意識のうちに下半身の動きが遅れていたのである。そのため、右脚を前進させたときには、相手はすでに、倒されないように1歩うしろへ下がっていたのである。このように1歩下がった相手をうしろに倒すためには、本来不必要な強引な力が必要であることに、私は気づかなかつたのである。

相手が1歩下がるのを防ぐには、右腕と右脚を同時に前進させればよい。そうすることで、相手が胸を押されて1歩下がろうとする前に、自分の右脚を相手の背後に差し込むことができるからである。このとき、右脚と右前腕は、前から見たときに1本の垂直な線をなすように、まっすぐに並ぶことになる。また、右腕と右脚を同時に前進させることで、自分の体の右側、つまり、右脇・右胸・右腰が、相手に接触するようになった。それまでは比較的手足の先端に近い部分を相手に接触させてい

たのであるが、胴体に近い部分を相手に接触させることで、軽い力で相手を投げられるようになった。このとき、「線」はたんに右前腕にのみ感じられるのではなく、右脇・右胸をつなぐ長い「線」として感じられるようになった。同時に、先生がこの新しい「線」にかなった動作をしていることを見ることができるようになったのである。

私の「線」の感覚はその後も繰り返して変化し、そのつど、私に見えるものも変化した。「線」の感覚とそれになつた動作が変化するたびに、それを接点とした他者の不透明な世界が私の世界と隣接していることに気づくのである。その結果、教室の空間は、特定の「線」の感覚と動作のありようを接点としてかろうじて覗くことができる他者の世界がひしめきあうものに変化してしまい、ほとんど見通しがきかなくなってしまった。先生や先輩の見ている世界は、いくつかの「線」の感覚と動作を通して見ることができが、それ以外は見えない。反対に、私の後輩にあたる初心者には、私に見えている「線」が見えていないため、「線」の感覚が重要であることをいくら言ってもコミュニケーションが成立しない。わかつたような顔をしていても、動作を見ればわかつていないことがわかるのである。

イギリスの太極拳

京都の調査に続いて、私はイギリスのマンチェスターにある太極拳教室、C太極拳センターで2007年から2年間にわたって調査を行った（名前は伏せてある）。そこでわかつたことは、いくつかの流派を組み合わせた型を練習しているS流のみならず、伝統的な流派の太極拳を練習している教室でも、型の練習は先生や練習仲間の他者性を露見させるということ

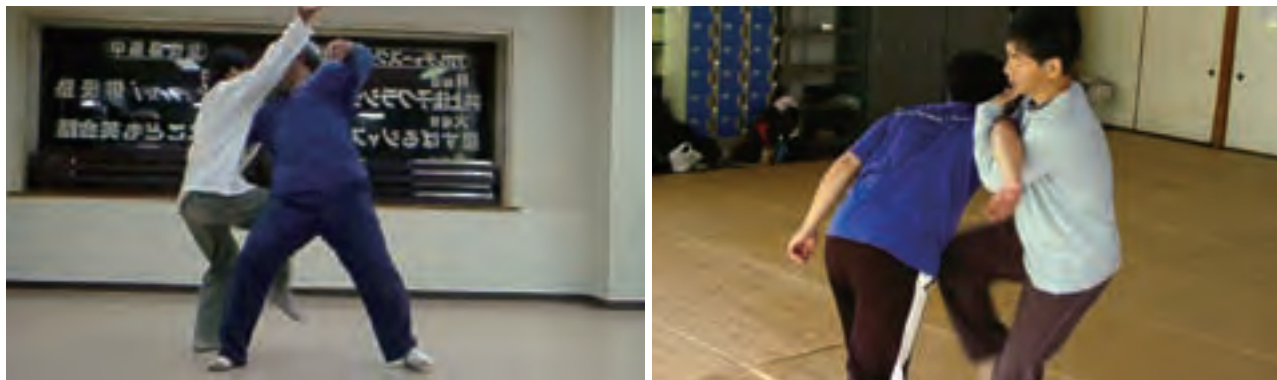


図1 S流の型

だった。つまり、同じ教室でともに練習しているはずの人々が、わずかな接点を除いては自分には見えない世界を見ている他者であることが次第に明らかになってゆくのである。

マンチェスターはイギリス中部の産業都市で、人口規模からすればロンドン、バーミンガムに続いて第3位であるが、政治的にはロンドンに次いで重要な都市である。また、エスニック・マイノリティーの比率が高いことで知られ、中心部には大きなチャイナタウンがある。C太極拳センターで教える先生も中国移民である。

この先生は、世界的に有名な中国の太極拳宗家の弟子であり、この宗家の教える型を忠実に教えているが、練習時間があまり取れないイギリス人の生徒向けに、簡略化した型も教えている。いずれも、S流の対練の型のように2人組で行うものではなく、1人で行うものである。先生が型の一連の動作を教室の前でゆっくり行うのにあわせて、教室に並んだ生徒たちがそれぞれ同じ動作を行う。このように、実際に相手に技をかけない練習では、生徒たちは自分が型をどれほどうまくできているかを知ることができないため、先生の動作をただ漫然と模倣することを余儀なくされるかに見えるが、そうではない。

C太極拳センターの型の練習の特

徴は、静止した姿勢が重視されることである。型の一連の動作の途中で、先生はしばしば動作を止めるように言い、生徒たちが静止している間に、先生が教室を回って1人ひとりの姿勢を細かに直してゆくのである(図2)。それに加えて、型よりもいっそう静止した姿勢に焦点を当てた練習として、練習時間の最後には必ず「站樁」が行われる。先生が教室の前で站樁の独特の姿勢で立つと、生徒たちも先生と向き合って同じ姿勢をとり、そのまま静かに5分から15分程度立ちつづけるのである。その間に先生は、型の練習のときと同様に生徒たちの姿勢を直して回る。

太極拳の型を構成する姿勢の多くは、初心者にとって難しいものである。第1に、すべての姿勢に共通して求められるのが、膝を曲げて腰を落とすことも、背筋はまっすぐに保つことである。これは、日常生活では見られない姿勢である。というのも、椅子に座る場合であれ、落ちたものを拾う場合であれ、日常的に膝を曲げる時は、同時に上半身を前傾させつつ背中を丸めるからである。そのため、初心者の多くは、先生と同じように腰を落として立っているつもりでも、前かがみの猫背になってしまう。そのうえ、型の中には両足を広く開いたり、両手を肩の高さに上げたりする姿勢もある。こ

れらの姿勢をとろうとすると、多くの生徒が腰を水平に保つことができずに前後左右に傾けてしまったり、両肩を力ませたりしてしまう。さらに、重心の位置や、膝の角度や、手足の位置や、頭の向きなど、注意すべき点はいくらでもある。

站樁の姿勢も同様の難しさがある。基本的には、足を肩幅に開いて、膝を曲げて腰を落として、両腕を胸の高さまで上げて輪をつくるように構える。太極拳の型ほど腰を低く落とさず、両腕の構え方も複雑ではなく左右対称であるため、一見して容易に見えるが、それだけに正確さが求められる。両肩と両肘は落ちていなければならないが、両肘は外側にも張る必要がある。胸は落ちていなければならないが、背筋は曲がってはいけない。体幹は完全に鉛直にして、重心を両足の間に落とさねばならない。

先生はそれぞれの生徒に対して、これらすべての点について1つひとつ修正してゆくのである。「腰をもっと落として」、「上半身を起こして」、「足先を内側に入れて」などと言葉で指導することもあれば、手を使って直接生徒の身体を動かしたり、緊張している部位を指で弾いたりすることもある。だが、多くの場合、前傾した上半身を起こそうとすると逆に後傾してしまったり、腰の傾きを直すと背中が反ってしまったり、腕の位置を直

すと両肩に力が入ってしまったりする。

正しい姿勢をとることも難しいが、それを維持することはもっと難しい。教室に生徒が多いほど、先生が全員の姿勢を直すためにかかる時間が長くなり、その間中、生徒たちは同じ姿勢を保持しつづけねばならない。先生の指導どおりに直すことができたとしても、先生が次の生徒のほうへ向きを変えてしばらくするうちに少しずつ元の姿勢に戻ってしまうのをよく目にした。しかも、これは先生の数を増やしたり、生徒1人当たりにかかる時間を減らしたりすることで解決されるべき状況ではなく、先生が意図的に作り出している状況である。というのも、全員を見回ったあとで、先生は教室の前で生徒たちのほうを向いて生徒たちと同じ姿勢をとり、そのままじっと立っているからである。生徒たちは先生と向き合いながらじっと耐えて、先生の「やめ」の合図を待たねばならないのである。

感覚を言葉で表現すること

初心者が型や站樁の姿勢をとると、身体の内側に違和感を覚え

る。見よう見まねで先生と同じ姿勢をとっただけでも窮屈なのに、回ってきた先生に直された姿勢は、いっそう窮屈で、不安定で、脚や肩や腰に負担をかけるものを感じられる。実際、すぐに身体の内側に痛みが出てくる。たとえ、姿勢を変えまいと相当に努力していても、時間が経過するにつれ、無意識のうちにより楽な姿勢へと崩れてしまうのである。

ところが、自分のまわりの先輩たちの多くは姿勢をあまり崩さずに立っており、涼しい顔をしているとまでは言えないにしても、自分ほどは痛みを感じているようには見えない。この印象がそれほど間違っていないことは、練習の最後にわかった。先生は、練習を終える前に必ず、1人ひとりの生徒に対してどのような感じがするか尋ねるのである。生徒たちは、「良い感じだった」、「リラックスした」など、漠然とした感想を言うこともあれば、「指先がむずむずするのを感じる」、「左足が引きつった感じだ」、「脚が燃えるようだ」など具体的に答えることもある。また、「エネルギー(気)」や「エネルギーのレベル」について答える場

合もある。これを聞いた初心者は、じっと立っている間にこれほどまでに多様な具体的なことが起こっているのか、と驚くのである(図3)。

私は、それぞれの生徒がどのような感覚の変化を経験したかを体系的に知るために、Cセンターの先生と生徒たちに個別にインタビューを行った。その結果、生徒たちは型や站樁で静かに立っているときに、さまざまな身体部位について明瞭かつ具体的な感覚を持っていること、そして、この感覚を言語化して先生やほかの生徒と交換することで、他人にできて自分にはできないこと、ないしはその逆のことについての認識を作り上げていることがわかった。

ある生徒は、型や站樁で立つたびに両手の温度が違うのを感じるという。一方がいつも他方よりも冷たいのである。彼はこれを先生に相談すると、先生は、冷たいほうの腕や肩に「エネルギーの流れの滞り」があるためだと答えた。彼は、両手の温度の相違という具体的な身体感覚を手がかりに、型や站樁において先生にできて自分にできないことを認識しているといえる。

別の生徒は、型や站樁をいくら



図2 Cセンターの型



図3 Cセンターで感覚について話す様子

やっても、ほかの生徒が練習の最後で話すような具体的な身体感覚を感じたことがないという。しかし、彼女はほかの生徒が言っていることを疑うつもりはなく、ただ、自分にその時が来ていないまでだと考えて、練習を続けている。彼女は、身体に何も感じないことによって、太極拳においてほかの生徒にできて自分にできないことを認識しているのである。

さらに別の生徒は、1人で站樁をやっているときに、突然腹部に「エネルギー」が沸き立つのを感じたという。練習を重ねることで、この「エネルギー」が身体中をめぐるようになり、あたかも「水が流れるように」太極拳の動作をすることができるようになった。すると、他人の動作を見るさいにも、それが「エネルギー」の流れに従ったものか、そうでないものかわかるようになったという。彼は、自分の「エネルギー」の感覚を手がかりに、太極拳において自分にできて他人にできないことを認識しているといえる。

スポーツと型と他者性

S流とC太極拳センターのいずれにおいても、初心者にとっては、教室の空間は先生の型の手本があるがままに見せてくれ、先生の語る説明もそのまま伝えてくれる透明な空間である。しかし、練習を重ねるなかで特定の感覚とそれがもたらす動作の重要性に気づくことで、自分の隣で同じ型を練習している仲間が、この感覚と動作という接点を除いては自分とはまったく異なるものを見ている他者に変化するのである。

したがって、教室に参加して型の練習を重ねることは、教室の空間を見渡すことができるようになることではない。逆に、透明だった空間が、わずかな接点だけを特定の他者と共有することで構成された複数の細切

れの世界へと分断されてゆき、この接点の奥に広がる不透明な他者の世界の存在に気づくことなのである。型の練習は、教室の透明な空間を、他者どうしが共存する不透明な空間に変化させるといえる。

型の練習がこのような効果を持つことは、一般的には認識されていない。なぜなら、型を練習することは、金属を溶かして型に鑄込むように、身体に本来備わっていた独自性を、型にはめて画一化してしまうことであると考えられているからである。しかし実際は、型に直接はめることができるのはごく表面的な身体の姿勢や動作だけであり、そうすることは、身体の多様性を抑圧するどころか、逆に、型の名目上の同一性の背後に隠れていた目くらむほどの多様性を表面化させるのである。

それは、第1に、個人におけるさまざまな身体部位の感覚の差異である（S流の金剛搗捶の型における前腕部の「線」がほかの部位と比べて相対的に重要であるという差異、C太極拳センターの站樁における両手の温度の差異）。第2に、第1の差異それ自体が変化することで生ずる差異である（S流における「線」の感覚の変化、C太極拳センターにおける「エネルギー」の感覚の発生）。第3に、第1の差異の自己と他者における差異である（S流における肘で相手を押してしまう生徒と前腕部の「線」で相手を投げる生徒の差異、C太極拳センターにおける、何も感じない生徒と「エネルギー」を感じる生徒の差異）。これら3つの差異の軸が交差することで、生徒たちは、自分たちが教室の空間を共有していても同じものを見ない他者どうしであることを認識するのである。

型の練習という、一見して画一的で他者に非寛容な活動が人を他者性の認識へと導くなら、逆に、一見して自由な活動が他者性を見えなく

してしまうということはないだろうか。私には、スポーツの試合に典型的に見られる、ルールのもとでの自由な競争がそのような問題を抱えた活動であるように思える。というのも、ルールとは動作の結果だけを意味づけする枠組みであるために、動作を生み出す身体感覚の多様性とそれが含意する他者の世界の存在から、人々の目を逸らしてしまうのである。

相当の修練を積んだ人にしか見えないはずの動作も、ルールのもとでは、試合における勝敗という誰にでも明らかな意味を与えられる。必然的に、この動作を生み出した選手を感じているものや見ている世界が一般の人々のそれとどれほど異なっているかは重要ではなくなってしまう。その結果、そのスポーツの動作に見て取れるもののいかに問わず、すべての観客は選手と一体になって勝利に酔ったり敗北に悲しんだりすることができる。オリンピックなどのスポーツの国際大会を観戦する人々がにわかにナショナリストになりやすいのはこのためだろう。

このような事態は、スポーツによる社会統合として手放して賞賛すべきものだろうか。応援する選手の勝利に酔っている観客は、観客に対する選手の他者性と、観客どうしの他者性からともに目を背け、他者を観念のうちに包摂しているにすぎない。その当然の帰結として、相手側の応援者などの包摂できない他者は排除される。

スポーツをその典型とするルールのもとでの競争が他者の包摂と排除をもたらさざるをえないならば、他者と共存する可能性を探るうえで、型の練習は多くの示唆を与えてくれるはずである。

センター主催・共催イベントのポスター・ちらし(2009年度開催の一部)



第5回こころの広場
2009年10月25日開催



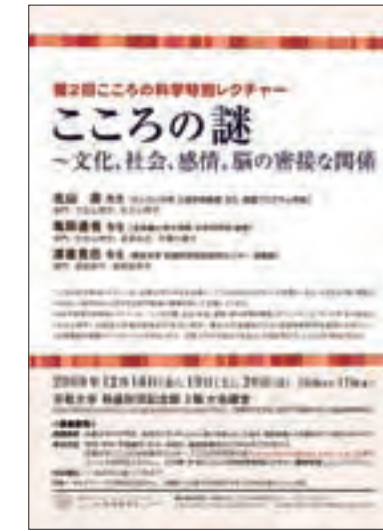
シンポジウム 遠野物語と古典
2009年11月23日開催



第31回こころの未来セミナー
2009年11月28日開催



「こころ」を考える高校生フォーラム
2009年12月13日開催



こころの科学特別レクチャー
2009年12月18～20日開催



第32回こころの未来セミナー
2010年1月14日開催



第6回こころの広場
2010年1月17日開催



シンポジウム 依存学ことはじめ
2010年3月14日開催



わく・はるく・ワークショップ
2010年3月24日開催